

## 職業奉仕あれこれ ―その4―

### 「職業奉仕の本質とは」

1月は職業奉仕月間です。月間の目的は職業奉仕の理念と実践について学び、職業奉仕の本質を正しく理解することにあります。

そこで今回は、過去の「ロータリーの友」誌や「ガバナー月信」の中から、職業奉仕を理解する上で参考となる二つの記事を見つけましたので、これを資料として紹介させていただきます。

一つ目は、2018-19年度の当地区の「ガバナー月信 Vol.7」からのものです。これは、2012-13年度当地区ガバナーを務められました呉ロータリークラブの大之木精二氏の「職業奉仕月間によせて」という記事です。この中で大之木氏は、職業奉仕のことを語るにはまずロータリー運動とは何かを理解する必要がある、ロータリーの運動の基本となるものはサービス(service)という考え方である、この「service」の真意を正しく伝える言語がなく「奉仕」と訳したところにそもそもの躓きがある、その真意とは「他人を思いやる心」(Thoughtfulness of others)と「他人のお役に立つ行動」(Helpfulness to others)であり、日本語の「奉仕」よりはるかに概念が広く倫理的ニュアンスが強いものである、ということを順序だてて説明されています。

この記事についてはご記憶の方も多いと思いますが、私は職業奉仕の本質を知るうえで大変参考になるものと思います。

二つ目は、2019年の「ロータリーの友」誌 Vol.67(1月号)に掲載された記事です。―「ロータリーの本質は職業奉仕」の真意とは― というタイトルで、長崎県の大村北ロータリークラブの佐古亮尊氏(第2740地区 1995-96年度ガバナー)によるものです。職業奉仕の本質について、具体例を示して説明されております。職業というものは利潤を追求するものだが、相手に満足してもらい、自分も納得し、社会からも納得してもらえるような労務の提供を心がけることが、ロータリーでいう職業奉仕の本質である、ということがよく理解できます。

2021-22年度 福山西ロータリークラブ  
職業奉仕委員長 勝岡 正剛

以上



## 職業奉仕月間によせて

2018-19年度 国際ロータリー第2710地区 奉仕プロジェクトカウンセラー・パストガバナー **大之木 精二**

今年も職業奉仕月間が巡ってきた。年々歳々繰り返される此の月間に於いて、ロータリーに於ける職業奉仕の重要性が何度も何度も説かれてきたにも拘わらず、依然として自分の言葉で職業奉仕を語れるロータリアンが決して多くない現実に鑑み、その原因が那邊にあるかを探ることも、地区リーダーの大きな責任であると考えている。

私が強調したいのは、ロータリーが、ロータリー運動が何かの理解を抜きにして職業奉仕は語れないということである。従って指示された文字数で其の解説を試みることも自体に土台無理があるのを承知で、私の持論を述べてみよう。

### 【I】「奉仕」ではなく「サービス」(Service)

初期の日本ロータリーでは、serviceの真意を伝える適切な訳語がないとして原語をそのまま使用していたが、時代の経過と共に「奉仕」と邦訳されるようになったことに、そもそもの躓きがある。其の真意は、「他人を思いやる心」(Thoughtfulness of others)と「他人のお役に立つ行動」(Helpfulness to others)であって、日本語の「奉仕」より遥かに概念が広く倫理的ニュアンスが強い。敢えて言えば、「忠恕」がserviceの真意に近い訳語であるが、根幹となる理念の正しい理解無くして職業奉仕は語れない。

### 【II】「親睦」と「サービス」はロータリーの両輪

ロータリアンなら誰でも知っている此の基本論の真意は、相互理解を深める所に親睦が生れ、そこに助け合いの心に根差すサービスの原型を見出すことにある。即ち親睦そのものの中に本来的にサービスの要素があり、これがロータリーにおける「親睦＝サービス」の原始形態であって、初期ロータリーには物質的相互扶助に加え、経営相談等を交わす精神的相互扶助機能があったことから、その事実を知ることが可能となる。「ロータリーは親睦とサービスの中に宿る」とは其の事実を述べた格言である。

### 【III】「サービス」(5大奉仕)の中核は「職業サービス」

1927年のオステンド国際大会で4大奉仕に分類され、初めて職業サービス(Vocational Service)なる言葉が生まれたが、「職業は奉仕の一つの機会」(ロータリー道徳

律)と言われる所以は何か。日常従事しているのが私達の職業であり、その気になればその職業をサービス手段とすることはいつでもどこでも可能である。ロータリーは個人奉仕が基本であるとの理念も加わって、職業サービスはロータリアンにとっては免れない義務でもあるとも言え、これこそが職業サービスはロータリーの根幹であるとする所以である。

この思想を更に体系化し肉付けしたのが、シェルドンの職業奉仕論であり、ロータリーはそのお陰で固い理論武装に成功したと言っても過言ではない。

### 【IV】「ロータリー」と「職業倫理」と「職業サービス」

ロータリーを定義する文言の中で最も分かり易いのは、次のポール・ハリスの言葉であろう。「ロータリーとは、宗教でもなければそれに代る何ものでもない。それは古来からの道徳観念を現代の生活の中に、就中職業生活の中で実践しようとするものである」。この言葉は、ロータリーとは、個々の職業を通じて行う実践倫理運動であること明快に物語っていると見えよう。「ロータリーの目的」の前文に於いてもそれを確認することが出来る。

職業サービスの中核思想となる「職業倫理」について述べるならば、「倫—仲間」「理—道理」の二つの単語が示すように、「人と人との間柄を良くしていく道、ことわり」が倫理であるから、「職業倫理」は「本来自分の為のものである職業が、他人の為のものでもあるようにする理念」と言うことが出来るだろう。

これら前述の諸々の表現を集大成した、私なりの職業サービスの定義は下記の通りである。

「ロータリアン一人ひとりが、その事業或いは専門職において最高の倫理規範を守り、これを最高度に発揮実践すること」が「職業サービス」である。そして更に要訳するならば、「職業サービスは職業倫理の実践」であり「仕事を倫理的に行うこと」であるとも言えよう。

「4つのテスト」は職業サービスの実践を点検する物指しであることを付言しておきたい。

# 私の職業奉仕

## 「ロータリーの本質は職業奉仕」の真意とは

大村北RC 佐古 亮尊

### 営利行為の根底に友情を置くべし

「ロータリーの本質は職業奉仕にあり」とは、ロータリアンの誰もが口にすることです。では、その職業奉仕とはどんなことをする奉仕かと問えば、「自分の職業を生かして社会のために尽くすこと」と、型通りの返事が返ってくるのではないのでしょうか。

ところが、「ロータリーの目的」第2項には、「職業上の高い倫理基準を保ち、役立つ仕事はすべて価値あるものと認識し、社会に奉仕する機会としてロータリアン各自の職業を高潔なものにすること」とあり、また、ロータリークラブ定款第6条の五大奉仕部門の第2には「奉仕の第二部門である職業奉仕は、事業および専門職務の道德的水準を高め、品位ある業務はすべて尊重されるべきであるという認識を深め、あらゆる職業に携わる中で奉仕の理念を實踐していくという目的を持つものである。会員の役割には、ロータリーの理念に従って自分自身を律し、事業を行うこと、そして自己の職業上の手腕を社会の問題やニーズに役立てるために、クラブが開発したプロジェクトに答えることが含まれる」とあります。

異論もありましょうが、これを要するに、「有用でない職業はない。それぞれに価値があり、そこに貴賤の区別はない。自分の職業を天職と心得て、その職業に責任を持ち、誇りを持って」ということでしょうか。

こうした理念を世に問うた最初の出来事が、1915年の「全職業人を対象とする職業倫理訓」でした。11カ条から成るその目玉が、この「職業は天から委ねられた天職で、貴賤の区別はない」ということと、さらに大事なのは「営利行為の根底に友情を置くべし」ということではないでしょうか。

「商売の根底に友情を置け」とは、商売の相手方を心の友と思ひ、カモと思ってはならないということです。私た

ちが取引をする商品はもともとお客さまのものをお預かりしているので、時が来ればお客さまの要求に応じて、お客さまにお返しすべきものです。その時、「責任をもってお返しします、大事にしてください」と手を握り、それを契機として親戚同様の付き合いが始まるような心の交流が生まれることが理想です。

### ロータリー哲学が常に磨かれてこそ、活動が生きる

このようにして、ロータリーは単なる社交クラブではなく、われわれの生活の糧である職業とは何だ、自分の職業は世のため人のためにどういう意味があるのかと「職業の意義」を模索し、ロータリアンとしての生きざま「ロータリー哲学」を追究し、その哲学を根底に置く倫理運動として成長してきたのです。全ての活動はその裏付けとなる思想なり理論なりが常に磨かれてこそ、その活動は生きてくのではないのでしょうか。

では、どのようにして磨くのでしょうか。それは言うまでもなく、毎週1回の例会に出席して、親睦の中にお互いの発想を交換し、切磋琢磨して自分を磨くのです。その自己研鑽の心は、アーサー F. シェルドン (1868～1935) によれば、「利己と利他の調和」ということでしょうか。その効果が電話の交換手から受付のお嬢さんにまで及んでいけば、その企業は栄え、儲かることはもちろん、その繁栄の効果は同業者を刺激し、ひいては社会を豊かにすることになるのではないのでしょうか。

ですから、他の同業者を見下すような言動は慎まなければなりません。同業者を疑心暗鬼にさせないような配慮を持って、自分の企業が繁栄するようになったノウハウも公開し、業界の智慧を高均質化し、そのエネルギーで、その業界と接触する全てのお客に幸せを与えることを念じたいものであります。

もっとも、ノウハウといってもすでに十分な慣行ができ

#### Annotation

\*全職業人を対象とする職業倫理訓 原典は The Code Ethics for Business Men of All Lines、邦訳はいくつかあります。1915年のサンフランシスコ国際大会で採択されました。この中の全11カ条にわたる職業倫理訓は「(ロータリー) 道德律」とも通称され、職業奉仕を考える際の古典的文献の一つです。

\*『奉仕こそわがつとめ』1948年刊行の、パーシー・ホジソン1949-50年度RI会長によるロータリーの歴史的文献。

て、商品の販路を開拓したというものに関してであって、今研究中、あるいは試作中のものは公開できないことは言うまでもありません。

せっかく開発したノウハウを公開したら、自分の利益が少なくなると思われるかもしれませんが、自分の独創でノウハウを出せる企業と、人のノウハウを学んでフォローする企業との間には、克服できない落差がありましよう。

こうして業界全体の智慧が上がると地域社会は活気を呈し、豊かになり、自分の企業も潤ってくるというものではないでしょうか。

『奉仕こそわがつとめ』に篤農青年の話があります。彼は研鑽努力して優れたトウモロコシを収穫したが、その翌年にはその優秀な種を同業者に配布して、皆に良いトウモロコシを作らせ、業界の技術水準を向上させ、この地域を豊かにしました。同時に、自分のトウモロコシもその近所の良質な花粉を受精することによってさらに品質が向上したというのです。まさに One profits most who serves best. です。

### 「二針三針の奉仕」に見るロータリーの本質

職業奉仕の概念ができたのは1927年、実証されたのが1929年の世界大恐慌の時であったといわれています。ロータリアンの企業は、一社も倒産しなかったということです。その経験から得たものは、職業を営む上において、自分の職業に誇りを持つためには職業倫理を守らなければならない。職業倫理を実践することにロータリーの本質がある、という職業奉仕理念の再認識ではなかったでしょうか。

昔、アメリカのニューヨークにジョン・ハンネーという靴屋があったといえます。彼は同じ弟子仲間の一人とほとんど同時に、しかも軒を並べて靴屋を開業しました。1年ほどしますと、隣の靴屋は叔父さんから思いも寄らぬ遺産を譲られてにわか金持ちとなり、ハンネーの店の何倍もの大きな店になりました。

ハンネーは焦りました。しかし彼はいら立つ心を抑え、「何もそううらやむことはあるまい。一生懸命やれば私だってやがて大きな店を持てるようになる」と腹を決め、今後の自分の仕事の方針を考えました。「靴を作る時、手間を省くようなことは一切やるまい。のみならず二針三針の手間を靴ごとに添えていこう。そうすれば靴の履き心地も良く、長持ちするようになる。そんな自分の作った靴はこれだというものを作っていくんだ。最初は気付かれなくても、やがてお客さんが分かってくれば自然にお客さんも増えてくるだろう」と。

平成31年 1月号

こうしてハンネーはあらゆる点に注意を払い、屈することなく、たゆまず努力を続けました。それから5～6年もすると、いつの間にか隣の店を通り越して、ハンネーの店にやってくるお客さんも増え、十数年もすると隣の店に倍する大きな店となり、アメリカ屈指の大靴店になって、業界をリードしたということです。

自分の職業である靴作りにおける二針三針の奉仕が、「良い仕事をしているな」と、彼の商品に有形無形の高い評価を与えることになり、信用という大きな財産を得て、大をなしたということでしょう。

このように、職業的・社会生活における奉仕の実践は、まず、自分自身が受益者になることによって、業界におけるランクも上がり、自信を持って業界をより良くリードすることができるようになるのではないのでしょうか。

本来、職業というのは私利私欲の追求ということで動いている行為ですが、儲けの金高で一喜一憂するのではなく、儲けを生み出す基になる考え方を、ロータリーは問題にするのです。

ハンネーは二針三針の奉仕をつけて靴と同時にお客の満足を買ったのです。だから彼は靴の代価を受け取る時、お金と同時にお客の感謝を受け取ったのです。そのプラスアルファが信用という積立貯金にもなり、お客との心の交流は、さらに店を繁盛させていったのではないのでしょうか。

### 職業奉仕は、金銭に集中しないこと

ポール・ハリスは「ロータリーの職業奉仕のことを一言で言えば、金銭に集中しないことである」と言っています。人間関係において金銭は、その終末処理の問題として避けられないものですが、その前に自分が世のため人のため、そして自分のためにどういう倫理的な義務を投下しようとしているのか、ということを考えよということでしょう。

こうして金銭を頂く前に相手を納得させ、自分も納得し、社会も納得するようなある種の労務の提供を心掛けるならば、私利私欲の追求がそのまま世のため人のためになる、とポール・ハリスは言うのです。

(第2740地区 長崎県 1995-96年度ガバナー)



©iStock.com/Gangis\_Khan